

巻頭言（2012年12月号）

理事長 新谷友良

「公共施設でのチャイム」

行きつけのスポーツジムにマッサージプールがあります。足裏から始まって、ふくらはぎ・太もも・腰・背中・全身とジェット水流が噴き出すエリアが分けられていて大層な人気です。このような場合、大概起こることは、人気のあるエリアを長時間独占する人がいて、ジムにクレームがついたようです。それで、ジムも一生懸命考えたのか、1分間ごとに鳴るチャイムが設置されました。1分間ごとのチャイムに従って、マッサージプールにいる人が、牧舎にいる牛(?)のように、移動します。みんなが正しく1分間ごとに移動する光景はチョットとした見ものです。

ところが、私はチャイムが聞こえませんが、チャイムが設置された後、どのようにマッサージプールを利用するか思案しました。常識的な対応としては、周りの人の様子をよく見て、周りが動けば自分も動くということです。幸か不幸か前後のエリアに利用する人がいれば、私も移動の流れに乗ることができます。問題はまばらに人がいる場合で、混んでいないから、チャイムなど無視してゆっくりマッサージを楽しんでいたら、あらぬ方から睨みつけられました。チャイムを無視して、ひとり長居をしてはいけないということなのでしょう。それで、今は仕方なく空いていてもひとり頭の中で「1, 2, 3……」の数字を数えています。1分間というのは、私の数えるスピードでは大体100までなので、100位になるとだれか移動するかなと様子を見て、2人位同時に移動するとチャイムが鳴ったとして、私も移動します。

しかし、これでは情けないと思い、プール監視のスタッフに「私は聞こえないが、どうすればよいだろう?」と言いました。彼は、プールに聞こえない人がいることに大変驚いたようです。表情、身振りから非常に困惑しているようでした。これ以上、水着で話し合いを続けても仕方がないので、「お客さまへの声」というジムに備え付けの用紙に、「聞こえない利用者もいる。チャイムも必要だが、ランプでも知らせて欲しい」と書いて、受付の人に渡しました。入会の際には筆談対応をしてくれて、非常に親切なジムなのですが、聞こえないことの困りごとはなかなか想像ができません。結果がどうなるか楽しみにしています。